



一歩一歩 第11号

平成28年5月31日（火）発行

校長 深谷 浩一

敗れても誇らしく

開校三年目にして、あれよあれよという間に甲子園出場を決めた本校野球部。甲子園では、出場16回を誇る古豪高松商を相手に善戦し、延長十三回にサヨナラ勝ちを収め、二回戦では、惜敗したものの「関東の横綱」と謳われた前橋工業を相手に途中まで互角以上の闘いを見せてくれました。

この明野高校の快挙に対して、開校時からまさに我が子のように面倒を見てくれた旧明野町は、加倉井町長の強力なリーダーシップのもと、1週間で1億円以上の募金を集め、2試合で人口の半数を超える町民8180人を何のトラブルもなく甲子園まで大型バス201台で運ぶという快挙を成し遂げました。両試合とも、町の職員120人、医師3人、看護婦6人、保健婦3人が付き添い、まさに町役場そのものが大移動しての応援だったのです。

大型バス100台が一路甲子園に向けて高速道路をひた走る姿はまさに壮観で、空には報道機関のヘリコプターが舞いました。往復24時間の道中では、エピソードも少なくなく、たとえば、サービスエリアで休憩のためストップすると、売店の商品をすべて食べ尽くし飲み尽くし買い尽くしてしまったそうです。

「開校三年目の奇跡」もいよいよ最終章です。最後に、甲子園での闘いを終えて帰郷した生徒たちを迎えて開催された「甲子園報告会」でのエピソードを紹介します。

二回戦に惜しくも敗れた翌8月17日のスポーツニッポン新聞に、「甲子園の詩」と題した一編の詩が掲載されました。この詩を書いたのは、阿久 悠（あく ゆう）という作詞家で当時その人の名を知らない人がいないくらい有名な方でした。一部



「甲子園報告会」で挨拶する奥澤寛一校長と加倉井町長(右端)

を紹介すると、1976年（昭和51年）には、「北の宿から」（都はるみ）を筆頭に、沢田研二、岩崎宏美、西城秀樹、新沼謙治、森田公一とトップギャラン、石川さゆり、森進一といった人気歌手の歌を数多く手がけ、日本レコード大賞、日本作詩大賞、日本歌謡大賞などの賞を総なめにした人です。「ペッパー警部」や「S.O.S」といったピンク・レディーのヒット曲もすべて氏の作品でした。歌謡曲ばかりではありません。「ふりむく君は美しい（全国高等学校サッカー選手権大会テーマソング）」などの行進曲の作詞も数多く手がけています。

そんな彼が、この年（昭和54年）からスポーツニッポン紙上で連載を始めたのがこの「甲子園の詩」であり、たまたまその年の題材に本校が選ばれたのです。この連載は、氏が亡くなる前年（平成18年）まで27年間も続き、以降夏の風物詩となりました。

旧明野町が組織した「明野高甲子園出場実行委員会」は、スポーツニッポン新聞の全国版に掲載されたこの詩を、旧明野町役場で選手を出迎える「甲子園報告会」の場で、本校の女子生徒に朗読させたのです。

それが、次の詩です。

甲子園の詩

敗れても誇らしく

阿久 悠

敗れて悔いなしなんて
美しく着飾った慰めに過ぎない
敗れば悔いはあるやさはある
悔いはなくてもやさはある
善戦であればあるほど
熱戦であればあるほど
健闘であればあるほど
敗れて後のやさは大きいものだ
悔いやくやさは大きいものだ

そうでしょう
もう少しで勝てそうだったのだから

一度は掌中にあった勝利が
翼がはえたようにとんで行った
それは疾風にさらわれた紙のように軽く
湿度を含んだ球場の空に消えた

力をそそいでも
声をからしても
ひきとり舞い
ふわして
遠い視界へ吸いこまれて行ったのだ

ぼくらはがんばった
がんばったから勝ちたかった
もう少しだった
もう少しで勝利の歌が歌えたのだ

サイレンが鳴った
ぼくらの野球は終わった
敗れた悔いは残るけれど
僕は誇らしく故郷へ帰る

そうでしょう
悔いと誇りは違うものだから

長く そして 短い
ぼくらの甲子園は終わった

一勝は洋中、あ、勝利が
翼がはえたようにとんで行
それは疾風にさらわれた紙
湿度を含んだ球場の空に消
え

そうでしょう
もう少しで勝てそうだったのだから

敗れて悔いなしなんて
美しく着飾った慰めに過ぎない
敗れば悔いはあるやさはある
悔いはなくてもやさはある
善戦であればあるほど
熱戦であればあるほど
健闘であればあるほど
敗れて後のやさは大きいものだ
悔いやくやさは大きいものだ

甲子園の詩
敗れても誇らしく

阿久悠

長く そして 短い
ぼくらの甲子園は終わった

悔いと誇りは違うものだから

そうでしょう
もう少しで勝てそうだったのだから

サイレンが鳴った
ぼくらの野球は終わった
敗れた悔いは残るけれど
僕は誇らしく故郷へ帰る

遠い視界へ吸いこまれて行、たのび
かんぱんぱんぱんぱんぱんぱん
もう少しで勝利の歌が歌えたのだ

力をそそいでも
声をからしても
ひきとり舞い
ふわして
遠い視界へ吸いこまれて行ったのだ

実行委員会が報告会の中で阿久氏の詩を生徒に朗読させ、皆に感動を与えたことを氏に知らせると、後日氏から詩のコメントとともに直筆の詩が送られてきたのです。

甲子園を敗れた。学校創設三回目にして
三回出場も出来ず、新選の生徒も涙を流して
れて、今年の初出場は全て甲子園にま、
こころだ。
甲子園は、茨城県決勝の時から見て、いかに
オマケの甲子園という感、の代表決定、威
新約だ。
人々が、よく身近なところ、このように、
座や、奇跡を頼り、気持ちを抱ける、校舎の、
い、い。甲子園の人々、胸も熱く、そして、
を見つめるのも、当然であらう。
二回戦で敗れた、いかに、新選と、
小、な、町、は、新選の、いかに、新選と、





一 歩 一 歩 第12号

平成28年6月1日（水）発行

校長 深谷 浩一

「開校三年目の奇跡」が教えてくれたこと

阿久悠氏が綴^{つづ}ってくれた詩「敗れても誇らしく」と題された「甲子園の詩」が、旧明野町役場前で行われた「甲子園報告会」で朗読されると、真っ黒に日焼けした選手たちも出迎えた二千人の大観衆も感動し、役場前の広場は大拍手に湧き立ちました。

旧明野町民は、小さな田舎町を全国区にのし上げてくれた選手たちを讃え、明野高校の教職員と生徒たちは、自分たちの学校を物心両面で支えてくれた旧明野町の人々に心から感謝したのです。



阿久悠氏の詩を朗読する生徒と加倉井町長



健闘報告会で町民から花束を受け取る浅野監督

○

○

○

これが「開校三年目の奇跡」の中身です。本校の活躍は、当時、大阪のPL学園のように有力選手を全国から集めた「野球エリート集団」しか甲子園には出られないと思われていた風潮の中で、開校三年目の無名の田舎者集団が、甲子園常連校と互角に渡り合い、ついには延長戦の末サヨナラ勝ちを収めるという、まさに「奇跡」のおかげで一躍全国のヒーローに躍り出たのです。

試合後掲載された朝日新聞の記事「アルプス席」が、当時の雰囲気を実に物語っていますので、最後にそれをご紹介します。



明野の善戦

健闘は甲子園を目指す全国の高校生に、

と勇気を与えたことだろう。

開校してわずか三年目。先輩

が一人もいる

わけでないか

ら、伝統校の

ような多方面での援助もなか

ったし、グラウンドも満足で

ないと聞く、そんな若いチー

ムが、甲子園に出場しただけ

でなく、古豪の高松商を破

り、前橋工をよく苦しめたこ

とにまず敬意を表したい。

浅野監督はじめ、選手たち

は一樣に満足な表情を残して

甲子園を去った。「来年ここ

にやってくる初出場の他校の

生徒に、何か残したかった。

初出場でも何も恐れることは

ない。同じ高校生がやってい

野球にとりくむ姿勢が正しか

ったのだと思う。浅野監督は

「秘密なんてありません。た

だ基本を大事に。キャッチボ

ールは相手の胸にしっかり投

げる。それとカットプレーの

繰り返しだけ」だという。

選手たちはそ

れを忠実に守

って練習に励

み、成果を試合で発揮した。

来年はまた今年を上回る参

加校数になるだろう。その中

に生まれたばかりの学校も数

多くあるに違いない。「明野

につづけ」の言葉を贈りた

い。

(国領)

全国の球児よ「明野に続け」

(朝日新聞 8月17日掲載)

あれから三十七年の月日が流れました。あのとき必死で本校を支えてくれた旧明野町長の加倉井正利氏はすでにこの世を去り、浅野監督も現在七十歳を越えています。また、旧明野町の職員の方々や募金という形で本校を支援してくれた多くの町民の皆さん方も年々高齢になっています。しかし、どれほど時が過ぎようと、あのとき本校が皆様方から受けた「ご恩」は決して忘れてはいけないものだと考えております。そして、そのご恩を今度は本校が旧明野町（現筑西市）に対して、具体的な形でお返しする責務が本校には課されているのだと痛感しています。もちろん、本校はこれまでも町の事業等に対する協力は行ってきましたが、三十七年前の事実に向き合い、改めて「町への恩返し」の気持ちを強くしたところです。その方法については、稿を改めてお話ししたいと思います。



一 歩 一 歩 第17号

平成28年 6 月 28 日 (火) 発行

校長 深谷 浩一

対佐竹高戦，いざ出陣！ ～壮行会で横断幕をお披露目～

6月23日（木）に開催された高校野球夏の県大会の組み合わせ抽選会の結果，本校は，大会3日目（7月9日（土）の予定）の第1試合で，県北の佐竹高校と対戦することが決まりました。応援は全校応援で，学校から全員貸し切りバスで笠間市民球場に向かうことになります。

その壮行会を明日（29日）の5時間目から体育館で実施します。今年は37年前に甲子園出場を果たしたときに実際に甲子園球場に掲げた横断幕を復刻し，それを笠間市民球場に掲げる予定ですので，明日その横断幕をお披露目します。

がんばれ 茨城県立明野高等学校



横断幕は，実はもう一枚作成しました。どんな文字が良いか生徒会に尋ねたところ，「感謝」ではどうだろうかという答えが返ってきましたので，それを採用することにしました。今年「恩返し元

年」を掲げている本校に，ぴったりの言葉だと思いませんか。旧明野町への「感謝」，保護者の方々への「感謝」，野球部員はそれに加えて，大好きな野球ができることに対する「感謝」の気持ちを忘れずに，全校で団結して球場に行きましょう。

併せて，これも37年前に甲子園球場で選手がかぶっていた帽子を応援用にアレンジしたものを後援会と同窓会で作っていただきました。試合当日は，応援団全員でこれをかぶって応援します。

なお，試合当日，本校の応援のために球場に駆けつけてくれた保護者の皆さん，卒業生の皆様，さらには，本校の応援席で生徒達といっしょに明野高校を応援してくれるすべての方々に，この帽子と「必勝」と書かれたうちわを差し上げます。このうちわには本校の校歌も記されていますので，エールの交換の時はいっしょに歌っていただきます。

ところで，保護者や卒業生の皆さん方は，応援団入り口からは入場できませんので，申し訳ございませんが，入場券をお買い求めいただき，一般席から入場願います。そして，入場後に応援団席にお出でいただきたいと思います。そこで，校長（右の写真）に声をかけていただければ，帽子とうちわを差し上げますので，よろしくお願いいたします。

